

募集人数	応募者数	参加決定数	参加者数
—	—	23	18（愛知県東海市）

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
	22														
九月二十日（日）		東海市 出発	自然の家 到着	はじまりのつどい	昼食	アイスブレーキング ・自己紹介等 （施設見学等）				（つどい）大浜 ・磯遊び ・浜遊び ・海をながめる （海とふれあう）		自由時間 夕食	入浴 棚田キャンドルへの参加 ナイトタイム①		就寝
九月二十一日（月）	清掃 朝食 朝のつどい	活動①（選択） （海に親しむ） ・シーカヤック ・ボート ・磯釣り（多目的） ・スノーケリング ・磯観察（大浜） ・浜辺を歩く				昼食	活動②（選択） （海とともに） ・シーカヤック ・ボート ・磯釣り（多目的） ・スノーケリング ・磯観察（大浜） ・浜辺を歩く				自由時間 夕食	入浴 （島の越も） （プレイH） ・手紙を書こう！ ・ボラとの語らい② ・夕日を眺める② ナイトタイム②		就寝	
九月二十二日（火）	清掃 朝食 朝のつどい	活動③（全体） （海を感じる） ・カッター なども可				おわりのつどい 昼食	東海市 着								

- ・ 事前にパッケージされたプログラムを消化するのではなく、参加者個人が興味・関心を元に「自分で決めた」内容に取り組むことで自己決定能力、責任能力を育むことを目的に、選択プログラムを中心に日程構成を行った。
- ・ 参加者の普段の生活で海との関わりが薄いことより、臨海型施設の特徴を最大限に活かし海のプログラムを中心とした活動を実施した。

◆運営のポイント

- ・ 日常生活で基本的な生活習慣を確固に確立していない子どもが見られることから、集団生活における基本姿勢は重視しつつも、ゆとりのある内容展開を持って参加者各人の負担が過大にならないように配慮した。
- ・ 施設到着後より海を感じることでできるスロー系のプログラムからスタートさせ、段階をおってアクティブなプログラムへと移行し、児童・生徒の体力的・心理的なペース配分を考慮したプログラム構成とした。
- ・ ボランティアと参加者が「1対1」の関わりをもつことが出来るように配置を考え、個々の状況や到達度を共有出来るように打合せを密にした。

◆安全管理のポイント

- ・ ボランティアに対し、事前に講習を実施し、適切に人間関係を築けるように配置し、安心して活動できる配慮を行った。
- ・ 水辺活動については余裕を持ったスタッフ配置と入念な事前指導を行った。
- ・ 時間にゆとりをもってプログラムを立て、参加者達の準備をしっかりと取ることにより、安心して活動に参加できるように配慮した。

3. アンケート結果

(1) アンケート

<参加者>

項目	4	3	2	1
事業全体をとらえてどうでしたか	94%	6%	0%	0%
この事業のプログラムはどうでしたか	88%	12%	0%	0%
この事業の運営はどうでしたか	59%	24%	17%	0%

4 満足 3 やや満足 2 やや不満 1 不満

(2) 参加者の声

- ・ 海が透明だった。みんなたのしそう。
- ・ 3回目だけど、毎年違うことをやって楽しかった。自然を感じました。
- ・ とてもにぎやかな場所だった。
- ・ 優しい大人もいるんだと思った。
- ・ 3日間は短いと思いました。まだまだいろんなことをしたかったです。

4. 成果と課題

(1) ねらいについて

・ 今年度は、棚田キャンドルに参加すること、たき火を囲むことを大きな変更点として加えた。また、カッターの説明を短くしたり、1日で海の活動を2展開したりした。東海市側と3回にわたる事前の打ち合わせで提案したり要望したりを繰り返しながら当日を迎えることができた。リフレッシュ&チャレンジのねらいのもと、自分で選択したことを実行することを東海市側は大切にされていた。前日決めたことを翌日実行することはほぼ全員が達成することができた。ねらいに即した行動ができたと評価できる。

(2) ボランティアについて

・ 昨年度に引き続き、参加者とボランティアをペアにして行動を共にすることができた。参加者の中には、なかなか馴染めず、ボランティアが苦勞する場面も見受けられたが、打ち解けようと心遣いをしてくれるシーンを多く見ることができた。ただ、3日間と長く、気持ちが切れそうになる場面もあったので、2日目の夜にボランティアとミーティングを持ち、気持ちを引き締めて行動するよう要請した。

(3) 本事業の今後の方向性

・今回、東海市側の学生ボランティアが出せない（結果的に1人）旨の連絡があり、若狭湾で多くのボランティアを用意することになった。教育事業として考えると、6年目に当たるこの事業は、一定の区切りの中で、東海市がボランティアを用意し、受け入れ団体の1つとしてくるようになることが望ましいといえる。若狭湾としては他の適応指導教室などと連携を模索する必要性も考えられる。ただ、工夫次第（棚田に行ってみる、楽しいカッターをしてみる）では、プログラム開発としての研究の余地はまだ残っているといえるので、次年度以降も東海市と連携しながら、取組を進めていく方向をまとめたい。

5. 活動の様子

